
生徒会長様々?

夏蜜柑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会長様々？

【NNコード】

N6723Z

【作者名】

夏蜜柑

【あらすじ】

「生徒会に入れと二日ほど前から言つていいはずだが。君は理解していないのかい？」

入学して一週間後に先輩である坂本夾に目を付けられてしまった藤沢優貴は、夾が大嫌いだった。なぜなら彼の本性は、口を開けば皮肉が嫌味で人を馬鹿にするような薄ら笑いをする俺様だったからだ。

気が強い主人公と俺様である先輩の生徒会の駆け引きです。

「1」入学と平凡と先輩

暖かい日差しが降り注ぐ春。この季節はいつも高揚と期待が混じつた気持ちになる。

私は、憧れていた如月高等学校むしかいこうに入学した。

何事も起こらない平凡な生活を送ると思つて、嬉しかった。

……そう思つていたのに。

私の期待は、入学してから一週間後にあつさりと裏切られた。

* * *

眠い4時間目を乗り切つて、ようやく待ちに待つた昼休み。

ああ、肩が凝つてるな。伸びてると、すぐ関節部分が痛い。ばきばきと音が鳴るのは気のせいだらう。

「あーだるい」

「お疲れ。もう四十肩?」

むつとして視線を向けると、友達の愛実まなみが笑いながら弁当を持つてきた。

「失礼な。まだ私は若いちゅーの!」

膨れつ面をしながら、私も弁当を出した。

愛実は、なんでも言いたいことはばつさりと口に出す性格で一緒にいると自然と付き合える。まだ入学して十日すぎたところだけど、馴染めてきた。

「あ、そういうえば。今日もあの人があるかもね

「…………」

硬直したように箸が止まった。

愛実は、にやにやしながら私の表情を愉しんでる。意地が悪くて

腹黒いのは、どうにかしてほしい。

「三日前からずっと来てるよね。飽きもせずに。いい加減、承諾したら?」

「嫌。絶対に嫌だ」

「うわー、本当に頑固。何が嫌なの? 普通さあ、はい喜んでとか言つて引き受けるでしょ」

「…………」何も言えない。

理由とかはないけど、なんとなくあの人気が気に入らない。

「だつて、面倒くさそうじゃん。私は、普通に生活したい」

「ふうーん。そうゆうもんかねえ」

「だつて、愛実はあの人性格を知らないから、そう思つんだよ! だつて、あいつの本当は」

直後、思いつきり勢いよく教室の扉が開いた。そして、鼓膜を揺さぶるような激しい音が響き渡った。……誰だ、馬鹿みたいに勢いよく来たやつは。

「藤沢優貴は、いるか?」

聞き覚えのある深みある声。頭全体に浸透するような低い声。何度も聞いても聞き惚れるような美声だと思つ。そんな声で自分の名前を呼ばれれば、誰だつてどきつとする。

私は聞こえたけど、あえて無視して知らない振りをする。

「…………優貴。いいの? 呼んでるよ?」

「」そり愛実も耳打ちしてくるけど気にしないで、ぱくぱくと弁当を食べ始める。

クラス中の視線が私に集まつて、恥ずかしいし痛い。

気まずい雰囲気の中黙々と食べるけど、途中で物凄い力で右手を掴まれた。その反動で立ち上がった。

「 ちよつ？」

私の制止の声を無視して、こいつは手を引いて連れて行こうとする。足を踏ん張って抵抗したけど、やっぱり力の差はあるから、無駄だった。

「 ちよつと、ねえ？ 待つて？」

とりあえず、急いで箸を置いた。そして、そのまままるですると引きずられて行く。

ああ、もう。本当に意味が分からぬ。なんで私がこんな目にあわないといけないのか。昼休みの時間は潰れるし、ろくなことがない。

……最悪。

* * *

旧校舎の屋上前の階段の踊り場で私は、ようやく解放された。溜息をつきながら、自分をここまで連れてきた奴を睨む。

180ちよつとある身長。長くも短くもない黒髪。幼く見える童顔。見透かすような鋭い瞳。余裕そうな口元。

これだけ見れば、かつこいい部類だと思つ。私のタイプじゃないけど。

私はわざと仏頂面で彼を睨む。

「 ……私に何のようですか。坂本先輩」

先輩はその態度が気に入らなかつたらしく、ギロリと私を睨んだ。
……怖いけど、気にしない。

「 生徒会に入れと三日程前から言つているのだが、君は理解していないのかい？」

愉快そうに歪められた口元から嫌みつたらしい言葉が、いらっしゃ。こいつは嫌味が皮肉しかいえないのだろうか。人を馬鹿にするのも

いい加減にしろと思つ。

「ですから、私はお断りしますと言つたはずです。理解されでないのは、先輩のほうじやないんですか？」

嫌味には嫌味を。私も口と性格の悪さと負けず嫌いには自信がある。

先輩は薄ら笑いを深め、喉をククッとならして笑う。

「次期生徒会長候補の私が君を指名すると言つてゐる。つまり、君に拒否権はないんだよ。この学校の生徒会の制度については、もちろん知つてゐるはずだろ？が」

「何度も言いますが、お断りします。私は生徒会に入る気なんてないですし、入りたくもありません。他の人を指名してください」それじゃあ、と階段を下りていこうとしたが、また強い力で右手が引っ張られた。制服の上でも細身に見える先輩は、一体どこからこんなに力が出るのだろう。

「何ですか！」

苛立ちを隠さずに私は勢いよく振り返る。

すると、先輩の顔が近くに迫ってきていた。

「！」

近い、近い、近すぎるでしょ？！ こっち来るなつづーの？

先輩は私の顔を見て、にやりと笑つて口を私の耳に近づけた。そして、呟いた。

「？」

その次の瞬間、私は右手を振り放して急いで階段を下りた。

* * *

一年の教室が立ち並ぶ廊下前の階段でようやく足を止めた。
まだ顔が火が燃え移ったかのように熱かった。おそらく、顔は林

檜のように真っ赤に染まっているのだろう。

ほ、本当に意味分からぬ。あの先輩は、なんで、私が目をつけられないといけないのよ！

そして、私が去る間際に言われた先輩の言葉を思い出した。

『私から逃げられると思わないことだな』

思い出す度に恥ずかしくなつてくる。こうこう事を平氣で言えるあの男は、変態というより頭がおかしいんじゃないんだろうか。しかも、あの人を馬鹿にするような笑みでよくも……。

「あつ！」

まさか私は、あの意地の悪い先輩にからかわれ、弄ばれたつてこと？

そう考へると、嫌みつたらしい薄ら笑いもそのせいだと気付いた。恥ずかしさがなくなつてくると同時に、私の中で沸騰したような怒りが浮かび上がってきた。

やつぱり、関わるところがないわ。

私は、絶対にあの先輩とは関わらないと心に決めた。

「1」入学と平凡と先輩（後書き）

恋愛物に初挑戦です。

読みにくい点もありますが、それでも読んでいただけたら嬉しいです。

【2】溜息と不安と悔ミルク

「この如月高等学校の中心となつてゐるのは、生徒会と部活連合、委員会だ。

「の中でも圧倒的な支配力を持つのは生徒会だつた。

毎年、夏休み前に生徒会長選挙が行われる。そして、生徒会長が生徒会役員を指名することができる。「一年生という条件を守れば、男女比及び学年を気にすることなく選んだ人物を思つような役職に就かせることができる制度があるので」。

その制度のため、ほとんどの生徒会長候補は春の段階である程度の人材を考えなければならない。

しかし、入学一週間後といふのは些か早すぎるものだらうと誰もが思つていた。

* * *

「ですから、断りますって言つてはいはづです！　何度言つたら分かるんですか。私は生徒会に入りません！」

「入らないって言つても君に拒否権はないんだつて何回言つたら理解してもらえるのかい？」

「一生理解する気になりません」

「まったく……ただ君が承知してくれれば簡単なのがね」

「このうるさい勧誘も相変わらず続いている。勧誘が始まつてから一週間たつたと思う。それにしても、執着というかしつこ過ぎると思つ。私はすでに怒りを通り越して、呆れてきていた。もう教室内の同級生もこの先輩が来ることに慣れてしまったのだらう。勧誘が来ないとき（といつても一、二回）は、同級生達から『今日はどう

した?』と心配（？）されるほどだ。

「どうした、君。溜息なんかついて

「えつ。何でもないです」

拙い。心の声が出てしまったらしい。

「そうか、私はもう帰る。次こそは考えといてくれ」

やう言つと、先輩はとつとと教室から出て行つてしまつた。

* * *

「あれ？ もう、帰つたの？ 今日は、随分と早く終わつちやつたね。何かあつたの？」

先輩がいなくなつた途端、愛実がにやにやしながらやつて來た。絶対に私をからかつておもしろがつている。

「さあ、分かんない。でも今日はすぐ帰つてくれて、よかつた」

「これでもう愛想つかされて優貴のこと諦めたりしたら、どうする？（笑）」

なんでそんなに楽しそうなのが分からぬ。しかも、（笑）つてなによつ？

「別に、どうでもいい。つてこいつか、諦めてほしこいつ！ そのまゝがいい！」

そうしたら、もう毎日しつこく勧誘されないし、やつと平凡な生活が送れるようになるはずだ。できることなら、田立たずたてたずに学校生活を充実させたいと思つてゐるんだけど。

「えーでも……あの先輩に田をつけられたら終わりだよ。私は、確実に優貴が生徒会に入ると思うね」

愛実は噂とか評判とかに詳しい。だから、先輩の噂やらも耳にしているんだろう。

「はあー！？ 私は入らないから。ありえないって

「んじや、購買のパンおーりで賭けね
むすつとした私に、愛実は生き生きとした表情で笑いながらいつ
言った。

私が頑固で絶対に入らうとしないことを知っているの。」

翌日、先輩は私の前に姿を見せなかつた。

* * *

「最近、来ないね。今日は来るのかな」

「さあ、どうだろ？」

最後に先輩が教室に来たのは、丁度一週間前だつた。

四月最後の週になつても先輩が現れるようすはなかつた。いつもなら、本鈴がなつた五分後には堂々とやって来るのに。

いつも来る人がいなくなると、なんとなく違和感があつた。それが一週間も続いてて、気持ちが落ち着かない気がする。

ちょっと！？ これって、私がいかにも毎日期待してますつて言つてるじゃない？ 寂しいとか……じゃないとと思うし、残念といつか、ホツとしているというか……これは違和感なのかな。

私の中で表現できないモヤモヤとした気持ちが不完全燃焼してゐる。
「優貴はやっぱり、寂しいとか思つてる？」

「ぶつ？」

口の中の苺ミルクを吹き出しそうになつた。危なかつた。さすがに吹き出すのは汚いか。

「な、なんでそんなこと！」

心の中読まれた？いや、その前に私は寂しいなんて思つてないはず！

「ありや、図星な　「ちがうつてば」

紙パックを机の上に勢いよく置いて、購買人気のカレーパンをぱくぱくと頬張る。せっかくのパンが台無しだ。どうして、食べる時にそんなくだらないことで悩まないといけないんだろうか。

愛実は何か言いたい顔をしてたけど、それ以上この話題に突つ込まず、別の話題を話した。

私はもう考えたくなかつたから、愛実が何も言わないで別の話をしてくれたのは有難かつた。

* * *

大丈夫。私はいつもと違うことがあつて心配しているだけ。先輩は本来私と関わる人じゃないんだから、関わらないだけ。私が望む生活が実現しただけ。
いきなり変わったから、気持ちが追いつけなくて混乱してるだけだ。

そうやって、私の中で浮かんでいるもやもやとした気持ちを納得させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6723z/>

生徒会長様々？

2011年12月25日17時54分発行